

論文

家庭内での使用言語と子どもの日本語会話能力 ーフィリピンにつながる子どもたちー

藤本陽子*1

キーワード：フィリピンにつながる子ども、家庭内言語環境、母語、日本語、多言語

1. はじめに

地域によって差はあるものの、公立学校のクラスのなかに外国につながりを持つ子どもが一人あるいは複数人数いることが珍しくない時代になった。彼らのなかには日本で生まれ育った者、母国で生まれ幼児期に日本に来た者、就学期までを母国で過ごし日本に来た者と背景はさまざまである。また両親が同国人、両親のどちらかが日本人と家庭環境も異なる。なお、本稿では、以降日本で生まれ育った者を第二世代、母国で生まれいずれかの時期に来日した者を1.5世代と呼ぶ。

家庭環境については上記のような日本で生まれたあるいは来日時期の異なりのほか、本稿で取りあげるフィリピン人の場合、河原（2011）が述べているように母親がフィリピン人である数が圧倒的に多く、その母親である「女性たちの結婚に至るまでの経緯がかなり複雑で、その後も複雑な状況が続く場合」があり、実にさまざまである。

また、フィリピン国内の言語が多様であるという特質から、母親の言語背景もさまざまである。

本稿では、このような家庭環境にあって日本に住むフィリピンにつながる子どもたちの言語に焦点を当て、以下の3点について検証したい。

1. 子どもたちをとりまく家庭での言語環境
2. 子どもたちが家庭で使用する言語
3. 子どもたちの日本語会話力

2. フィリピン人の言語的背景

2.1. フィリピンの言語事情

Ethnologueによれば、フィリピン国内での主要言語は共通語としての英語、国語としてフィリピン語と言われる言語（厳密に言うとタガログ語と同義ではなくタガログ語をベースとした言語）であるが、海外からの移民の言語を除いてそのほかに181の言語が現在生きている言語という。この181の生きている言語というのは、島またその島の地域による言語圏内で生活レベルで使用されている言語である。主要言語というのは公用語として位置づけられているものである。例えばテレビのニュースはフィリピン語あるいは英語である。一方生活レベルで使用されている言語には日常会話のほか、例えば看板に使用されている言語がある。但し現在教育言語政策の転換期にあり、新言語政策に移行中であるが、母親世代はどの地域の出身であっても教育言語である英語とフィリピン語で学習し、少なくともバイリンガル教育を受けてきている。前述の河原によれば、フィリピン人女性にとって高い英語力はプライドになっているとのことである。しかし金（2004）はフィリピン本国では、このバイリンガル教育は地域出身者によっては学習言語が二言語とも外国語であり、ドロップアウトが多かったことが問題となっていたことを報告している。実際、私が日本で出会ったフィリピン人のなかにも英語が話せない人がわずかながらいた。

したがって、フィリピン人と言ってもその言語的背景や言語能力レベルは異なり、さらに学習言語としての英語とフィリピン語あるいはタガログ語以外の言語が、日常レベルでの言語として使用されている多言語

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

背景を持っていることも考慮に入れるべきである。

2.2. 日本語事情

河原が、母親世代の日本語の話す能力は滞在期間が長くなると高くなるが読み書きはほとんどできないと報告している。また三田村・山崎 (2010) は、親の日本語能力の低さのために子どもと会話ができないという状況は少ないことを報告している。

2.3. 日本での母国語使用環境

河原によれば、フィリピン人女性は日本人の配偶者を持つことが多く日本人社会に混ざることから集住せず、他の国の人々のように〇〇タウンのような地域、コミュニティは成立しないと言う。

たしかにフィリピン人は集住することはないが、フィリピン人を母親にもつ子ども同士が学校で出会い、同じ学校に子どもが通っていることが分かったフィリピン人母親同士のつながりが生まれるといったケース、あるいはある一人のフィリピン人女性が自分が家族と居住する借家の大家と親しくなり、彼女を通して他のフィリピン人女性の家族がその大家の賃貸物件を借りることによって近隣に居住するといったケースもある。このような環境にあっては、母親同士で母国語（英語ではない）を話している。

また、宗教施設を中心に集まっているフィリピン人は教会という場で居住地域という物理的地理的な距離を越えてコミュニティを形成している。ⁱその場で使用される言語は母国語であり、フィリピンの様々な地域から集まっていればタガログ語圏出身話者がタガログ語を話し、他はフィリピン語を話すことになる。

3. 調査地概略

カトリック梅田教会は東京都の北東部足立区に所在する。この教会には調査当時である 2010 年、1000 人ほどのフィリピン人が通ってきていたと推定されるが、フィリピン人は教会を定めず教会を渡り歩くため、固

定的な人数を把握することが難しい。日本人は教会の名簿に登録をするが、フィリピン人の多くはそれをしていないためである。

またそのため、どの地域（足立区、足立区以外の東京都内、あるいは隣接する埼玉県等）から来ているかを把握することができていないが、英語のミサが毎週行われている教会が周辺にないことにより、越境してこの梅田教会に通ってきているフィリピン人が多くいるのが現状である。

筆者は、当梅田教会の英語ミサに集まるフィリピン人コミュニティーおよびフィリピンにつながる子どもたちと関わりを持って 6 年になる。2009 年当初、第一世代である母親について次の点が主任司祭から指摘されていた。

1. フィリピン人女性が話す日本語が日本人の夫から学ぶ日本語であるため、男性言葉である
2. フィリピン人の母親が、子どもが学校から持って帰ってくるプリントの漢字が読めず苦労している
3. 日本語能力が日々高くなる子どもと母親の間でコミュニケーションが取れなくなっている
4. 上記の理由から子どもが母親を低く評価している

そのため、第一世代であるフィリピン人女性に向けての日本語教育が急務とされ、ボランティアによる日本語クラスが開かれていた。フィリピンは非漢字圏なので、表音文字であるひらがな、カタカナのほかに漢字も一から学ばなければならない。しかし特に「子どもに漢字が教えられるようになりたい」という自分のみならず子どもへの教育を考えての漢字学習を求める声が大きかったようで、2009 年に筆者が携わる前は自由参加で子どもたちが使用している漢字学習書を 1 年生から学んでいた。しかし日々日本語で勉強をする子どもたちの漢字量に対しての週一日約 1 時間のクラスという差、また成長期にある子どもたちの吸収力と成人女性の吸収力の差で、フィリピン人女性たちが期待

するような子どもたちの漢字量に追いつくことは起こりようもなく、女性たちの焦りは解消されていなかった。むしろ、子どもたちに決して及ばないという諦めも見えていた。その後筆者がボランティアを引き継ぎ、自由参加ではなく希望者の登録制で日本語一般と漢字学習の短期集中講座を開いた。ここでは通常の外国人が学習する漢字のテキストを使用した。それは子どもの学習を追いかけずに学ぶことで、場合によっては子どもより先んじて学習する漢字があり将来子どもに教えることがあるかもしれないという可能性があり、それが少しでも母親の自信につながれば良いという考えからだった。その場に集まった女性たちは、教会活動に熱心な女性で多くが小学校に通う子どもを持っていたが、なかには日本滞在期間が長く子どもが成人している女性、あるいは来日して間もない女性もいた。来日して間もないその1名を除いて概して聴く・話す能力はあるが、日本での仕事や生活で身に着けた日本語で文法的には誤りが体系的に見られ、読み・書き能力は低く、本人たちは概して4技能に自信がなかった。しかし、この場に集まる女性たちのなかには、主任司祭の指摘1のようないわゆる粗暴な日本語を話す人はいなかった。

一方、同主任司祭から1.5世代、第二世代の子どもたちの学習意欲、日本語能力、学力についても次のような指摘がされていた。

1. 日本語能力の低さにより学校の勉強についていけずドロップアウトする子どもが多い
2. 日本の歴史を学ぶ理由が見いだせず、日本の歴史学習への意欲が低い

1は、言語面の発達について考慮すべき段階、そしてそれが理解されず日常会話が成立することから学習言語能力もあると過大評価され、学習における日本語の支援が実際には必要であるにも関わらずその支援が打ち切られてしまうという問題による。この問題はフィリピン人に限ったことではなく、多くの研究者が指摘している。

2の日本の歴史学習の理由については、太田(2005)が、日本の公教育がナショナルスティックな国民教育であり、日本人のための教育であると論じておりⁱⁱ、多文化を背景にもつ子どものフィリピン人—日本人のダブル、あるいはフィリピン人としてのアイデンティティに関わっていることが考えられる。すなわち、なぜ自分は日本人ではないのに日本の歴史を学ばなければいけないのかということである。

この1.5世代、あるいは第二世代の子どもたちの多くは、日本語能力は低い英語能力が高いから英語のミサに来ているのではない。ミサに参加する母親に連れられて来ているにすぎないので、ミサ中言葉が分からず手持無沙汰な状態であり、窮屈さを我慢して母親と一緒に座っているか、聖堂の外で遊んでいるかのどちらかであった。

その後2010年度にこの1.5、あるいは第二世代に対してMCY (Multi Culture Youth) プログラムⁱⁱⁱが1年間開かれた。このプログラムは語学力ではなく、多文化を持つ子どもたちが自ら自分の多文化性を認識し自信を持ち、将来像を描くことに主眼が置かれていた。筆者はこのプログラムに携わったが、そこに集まった子どもたち16名の言語背景は、タガログ語を理解する子ども3名(両親がフィリピン人、就学期途中で来日し兄は在フィリピン、姉がフィリピン留学中)を除き、日本語だけを理解していた。またこの子どもたち3名のタガログ語の能力も様々である。

4. 調査対象および調査方法

家庭での言語環境についてはフィリピン人を片親または両親にもつ子どもの親にアンケート(英語で表記)を行い、3名の子どもたちの日本語会話能力については個別にOBC会話力テスト^{iv}を行った。この3名の子どもたちはMCYに参加した子どもたちで、2010年から筆者が観察をしていた子どもたちである。

5. 調査時期および調査内容

アンケートの調査時期は2010年6月～7月である。無作為にアンケートを配布・回収するという調査を二度実施した。二度行ったのは、30件回収する予定が一回目の調査の配布30に対しての回答数が戻ってこなかったため、それでも十分な回答数を回収できなかったため、人の少ない夏休み期を終えた9月にさらに同じ内容のものを、前回回答した人以外にアンケートを行ったわけである。

調査内容は、滞在年数、日本に滞在する子どもの人数（フィリピン本国にいる子どもは数えない）とその年齢、その子どもと父親あるいは母親間では何語を使用しているのか、父親と母親間では何語を使用しているのか、兄弟間で何語を使用しているのかである。言語は、英語、日本語、タガログ語と、タガログ語が主言語ではない地域出身者を考慮に入れその他フィリピン語の4言語を選択肢とした。

子どもに対して行った会話力テストは2011年度末に行った。

6. アンケート調査結果基本資料

最終回収回答数は33である。うち有効回答数は31だった。無効となった2件は子どもがいないと答えたもので、今回の調査対象からは外した。男女別で見ると男性が1名、女性が31名である。日本に在留するフィリピン人は女性が多い（男性47,204人：女性164,512人 2010年7月7日政府統計による）が、無作為の配布ではあったにも関わらず今回の回答者の男女差はさらに開きが大きくなった。これは、実際教会に日曜日に来ている多くが女性であることを反映したものと考えられる。

1名の男性が回答者のなかの女性の一人と夫婦である可能性もあるが、夫婦によって子どもに対して使用する言語が違うこともあるのであえて回答数に入れてある。

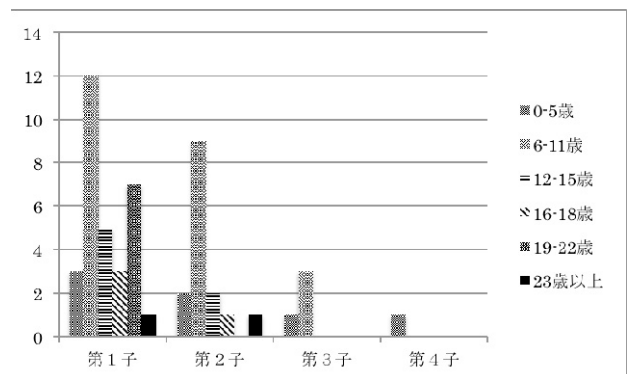
回答者の年齢層は30歳～34歳6名、35歳～39歳5名、40歳～44歳14名、45歳～49歳4名、50歳～54

歳2名であった。実際には20歳代も教会に来ているが、今回のアンケート回答者には20歳代は1人もいなかった。40歳代前半が突出して多く、その他の年齢はそれより若い層の方が多い。

滞在年数別では1～5年6名、6～10年6名、11～15年4名、16～20年8名、21～25年5名、26～30年2名であり、滞在年数は16年～20年がやや多いが、四半世紀以上の2名を除けばほぼ同人数となっている。

子どもの年齢層とその人数は次のグラフのようにになっている。前述のとおり、子どもがフィリピンにいる場合もあるので、今回の調査対象とする子どもの年齢および人数は日本国内に在住する子どもについてのみとしている。年齢は就学期前、初等教育、中等教育前期、後期、高等教育相当年齢、それ以上で分けた。

グラフ1：子どもの年齢層と人数



第一子人数は31、第二子人数は15、第三子人数は4、第四子人数は1である。第一子が6～11歳（小学生とは言い切れないがほぼ、小学生の年齢）という回答者が最も多く、続いて19歳～22歳（大学生とは言い切れないがほぼ、大学生の年齢）となっている。また、第二子、第三子も小学生の年齢の子どもの人数が一番多くなっている。このことから、日本滞在年数にかかわらず調査当時子どもを小学校に通わせている家庭が最も多いことが分かる。そして兄弟は一人っ子、2人兄弟がほぼ同数おり、それ以上の子どもを持つ家庭は少ない。

この人数にはフィリピンで生まれ、後に日本に移住した子ども、日本で生まれ日本で育った子どもが混在

していると思われる。

7. 調査結果

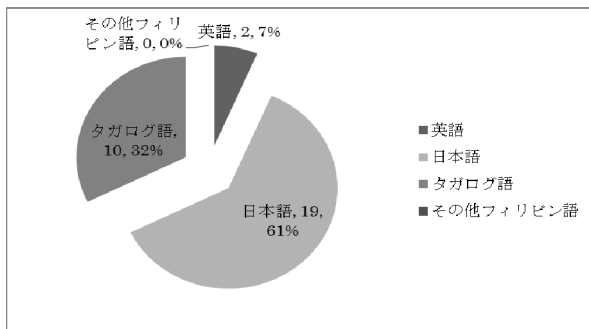
フィリピン人である親が、子どもに何語を使って話しているかについての結果をまとめたものが以下である。

7.1. 第一言語使用

まず初めに第一子に使用する第一言語についての調査結果である。

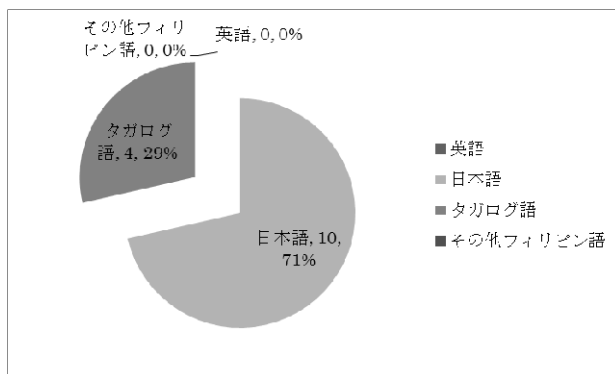
グラフを見て分かるように、第一言語として最も多く使われているのが日本語であり、31人中19人、61%を占めている。一方母語であるフィリピンの共通言語とほぼ同義のタガログ語の使用は31人中10人の32%。英語の使用もあるがわずか2人の7%である。

グラフ2：第一子に使用する第一言語



次に第二子に対してフィリピン人の親が使用する第一言語は以下のようにになっている。

グラフ3：第二子に使用する第一言語



第二子の数は先述のとおり15人であるが、回答数は14だったので、このグラフの母数は14である。第二

子になると日本語が圧倒的に優勢になっており使用率が71%に上がり、タガログ語は29%と下がり、英語に至っては0%となっている。

第三子の数は4人で、解答数も4だった。しかし母数がさらに減っているので、第二子までとの比較はせず数字のみ挙げておく。すなわち、日本語使用が3、タガログ語1である。

なお、第四子については、回答者のうち1名にのみ第四子がおり、タガログ語使用という回答を得ている。

また、第一子から第四子に対する第一言語の使用について違いがあるかという点については、3名について使用言語が異なるという回答があった。うち2名は第一子に対しての第一言語が英語であるのに対し、第二子に対してはタガログ語、またもう1名は第一子に対しての第一言語がタガログ語であるのに対し、第二子に対しては日本語という結果になった。ちなみに、後者の第一子—タガログ語、第二子—日本語という家庭には第三子もいるが、この第三子に対しては、第二子同様日本語が使用されているという回答であった。

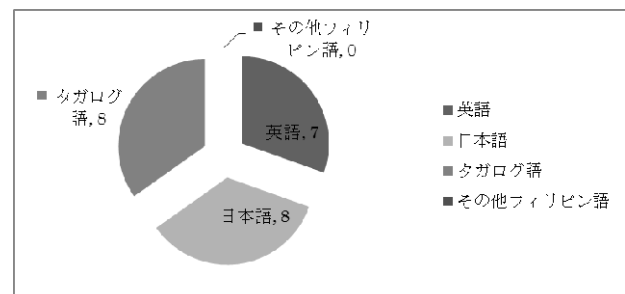
以上のことから、第一子、第二子、第三子ということによらず、複数の子どもに対する第一言語の使用の違いはあまりないという結果となった。つまり、親が子どもによって使い分けをほぼしないということが明らかになった。

7.2. 第二言語使用

次に第二言語の使用についての結果を述べる。

グラフ4は、第一子に対してどの言語が第二言語として使用されているかを表したものである。

グラフ4：第一子に使用する第二言語



回答数は、第一子総数の31から23と減っている。これは、使用されている言語が一種類である家庭からの回答がなくなったからと考えられる。第二言語については、英語、日本語、タガログ語とも使用されている割合はほぼ同じという結果になった。

内訳としては、第一使用言語が英語と回答した2名のうち、1名は第二言語としてタガログ語との回答で、もう一名については言及されていない。第一言語としてのタガログ語使用者10名のうち半数である5名が第二言語として日本語を使用し、第一言語としての日本語使用者19名のうち7名が第二言語としてタガログ語を使用、そのほかは、それぞれ第二言語として英語を使用している。

次に、第二子に使用する第二言語についてである。第二子は、第一子に比べて母数が11(総数は15)と減り、英語使用の割合が圧倒的に多くなっている。つまりタガログ語—日本語あるいは日本語—タガログ語が第一、第二言語として使用されているケースは少なく、むしろいずれかと第二言語が英語という組み合わせが多いことが分かる。

第三子に対しては、英語が2、タガログ語、日本語ともに1である。回答数の合計数が4と第三子の合計数と同数であることから、第三子に対しても、複数の言語が使用されていることが分かる。

7.3. 第三言語使用

第三言語使用に関する結果である。

まず、第一子に対する第三言語の使用状況についてである。

第三言語を使用している総母数は第二言語の23から5とさらに減少している。使用される言語は第二言語までで、第三言語の使用は極めて少ないという結果となった。英語とタガログ語のそれぞれ回答数が2ずつで、この数の少ないデータから日本語を第三言語として使用するのはマイノリティであると結論づけるのは難しい。しかし、すでに第一言語、第二言語での日

本語使用率と合わせて考えれば、日本語が第三言語になる状況は極めて稀であると言えるであろう。

第二子に対する第三言語の使用状況については、回答総数が3(母数4)である。回答者の内容の詳細としては、英語1、タガログ語2あり、家庭での使用状況としては、第一子と同じ言語を使用しているという回答であった。母数が極端に少ないが、既出のデータを基に言語の優位性から並べると、日本語>タガログ語>英語を使用している親が最も多いことが分かる。

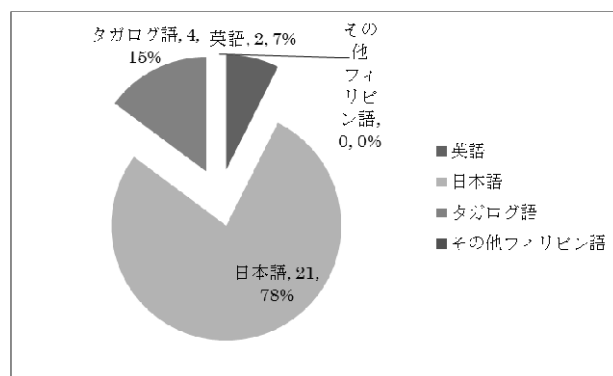
第三子に対する第三言語は、回答数が3と総数より1減少している。そのうちタガログ語使用が2、日本語が1という結果になっており、第二言語の時にすでに述べたように、英語は第一あるいは第二言語として使用されているので、第三言語として使用されることはない。

なお、第一子(14歳)、第二子(1歳)をもつ親の1件からだけ、第四言語としてその他のフィリピン語(パンパンガ語)を使用しているという回答があったことを付け加えておく。ちなみにこの人の第一言語は日本語、第二言語はタガログ語、第三言語は英語で、配偶者は日本語。子ども同士は日本語(と言っても年齢から推測しておそらく一方通行の会話)を使用しているとのことである。

7.4. 配偶者の使用言語

次に、配偶者の子どもに使用する言語についての調査結果を述べる。

グラフ5：配偶者の子どもに使用する言語



有効回答数が27というのは、配偶者についての記載がないものがあるためである。これは配偶者の死亡、あるいは離婚、別居等により配偶者が現在いないことからだと考えられる。アンケート回答者の子どもに対する第一言語の「日本語」よりやや割合としては高く、27の配偶者のうち21人が日本語使用なのは日本人配偶者だからであろう。また、配偶者も回答者同様英語よりタガログ語使用が多い。

7.5. 兄弟間の使用言語

次に掲げるのは、子ども同士で使用する言語である。

子ども同士で使用するためには、もちろん第二子以下の兄弟がいなければ成立しない。したがって、第一子しかいない家庭からの回答を得られることはない。第二子の数は15だが、実際の回答は15人中の10人のみであった。

その中で、第一言語として使用されているのは日本語が一番多い回答数8である。英語とタガログ語という回答数は1ずつであり、兄弟間で使用される言語は日本語が圧倒的に多い状況が明らかとなった。

ちなみに、子ども同士で使用する第一言語についての質問に対する回答と、配偶者が子どもに使用する言語に関する回答があったものを比べてみると、配偶者と子ども同士が使用する言語はほぼ一致している。配偶者が日本語を第一言語として使用すれば、子ども間でも日本語が使用される。また、配偶者がタガログ語を使用している場合は、子ども間でもタガログ語が使用されている。この一致は、家族での優先言語によるものと思われる。

子ども同士で使用する第二言語は、回答の母数が4と第一言語からさらに減っている。子ども同士では複数言語の使用がほとんどないことが分かる。その内訳は日本語が3、タガログ語が1であり、子ども同士での英語使用はないことが分かる。

7.6. 親の使用言語に対する問題意識

アンケートの最後の子どもの言語について問題はあるかというオープンエンドの質問に対して次のような回答があった。(特に数字のないものは1名ずつ)

- (ア) 子どもが英語を忘れてしまっている。
- (イ) 日本語と同時に英語がもっと話せるようになるためにアクセントについてもっと学習しなければいけない。
- (ウ) 英語を教えなければいけない。
- (エ) 子どもとミスコミュニケーションがおこるので、自分ももっと日本語を学習しなければいけない。(2名)
- (オ) 子どもがフィリピンで生まれ、フィリピンの方言をより多く使う地域で育ったため、日本語を話すことができない。時間があれば自分が日本語を教えたい。
- (カ) もっと日本語を練習させなければいけない。

以上を見ると、子どもにとっても母語あるいは継承語になるはずであるフィリピン語能力について言及する親はなく、日本語あるいは英語が焦点となっていることが分かる。また、子どもとのコミュニケーションに、子どもに親の母国語を教えるのではなく、親が日本語を学習しなければならないと考えていることも分かる。実際に家庭ではタガログ語が使用されているという結果もありながら、英語という世界的に共通語ともなる一大優勢言語と日本語という居住地での優勢言語という環境にあつて、母国語は劣勢言語であり、親が自分の母国語を継承することに必要性を見出していないようである。

(オ) は、子どもが方言を話すということだが、アンケートのなかでは選択肢の「その他のフィリピン語」を選んでいなかった。家庭では母親は子どもが育った地方の方言ではなくタガログ語を使用、父親は日本語を使用していることによる。

7.7. 家庭内言語環境と子どもの使用言語

以上第一子、第二子という子ども別の言語使用状況

を見てきたが、ここではあらためて家庭内で使用されている言語について考察する。

家庭でフィリピン人親と子どもの間で使用されている言語は、第一・第二言語を合わせると日本語が一番多く、その次に親の出身地域に関わらずタガログ語が多い。フィリピン人親は少なくとも英語とタガログ語というバイリンガルであるにも関わらず、日本に来て英語を家庭で使用する人が少ないことが明らかになった。このことが7.6に述べたように、子どもに対する英語教育の不足という問題意識につながっているのかもしれない。しかし、ではなぜタガログ語ではなく英語を使用しないのかは不明である。また、日本語に次いでタガログ語の使用率が高いことから程度の違いはあれ、タガログ語を理解する子どもは実際は多いと思われる。

8. 子どもの日本語会話能力実際例

8.1. ケース1

Aは調査当時12歳、小学校6年生である。フィリピンで生まれ、1歳半で来日。日本に来て10年半になる。母がフィリピン人で母親とは日本語で会話。時々母親は英語を話す。父親は日本人で日本語を話す。両親の間では日本語が話されている。兄弟は小学生の弟が一人日本にいて同居し、弟とは日本語で会話している。日常会話では「穿く」と言うべきところを「着る」という誤用が時々観察される。

OBC会話力テストの語彙カードでは、55の単語のうち一つが出なかった。その理由として本人は「言わないから」という。またもう一つは別の単語で言い換えがなされており、誤りではないものの的確な単語ではなかった。

また対話面での問題はなく会話の質は高かった。認知タスクでは、因果関係を説明する言葉の理解が誤っていたが、教科で学ぶ専門用語を使用し説明することができた。

8.2. ケース2

Bは調査当時9歳。小学校4年生である。フィリピンで生まれ、3歳で来日。日本に来て6年になる。姉がいるがフィリピン在住で日本語は話さないで、姉とは電話やインターネットを通じてタガログ語で話す。両親ともフィリピン人だが、父親は日本語をタガログ語より話し、第二言語としてタガログ語を話す。母親は英語を第一言語として話し、第二言語としてタガログ語を話す。日本で英語教師をしている。両親間ではタガログ語を使用。日常の観察では特に英語的な「来る」と「行く」の混用が見られる。

OBC会話力テストの語彙カードでは55のうち3つ分からず「知らない」、「なんて言う？」と答えた。また一つを日本語ではなく英語（しかし発音は日本語）で答え、1つはA同様別の単語で置き換えたが的確な単語ではなかった。

対話面での問題はなかったが、物語では単語が分からず英語を使ったものが一つ（しかし発音は日本語）、最初誤用していた単語を話の途中で思い出して言い直したものが一つ、もう一つの単語については分からないので様々な言葉を使って説明した。語彙が少ないことから単語選択の正確さは欠くが、単語が分からなくても自分の知っている言葉で説明することができるだけの能力と知恵を持っている。発音もイントネーションも自然である。

8.3. ケース3

Cは調査当時12歳。小学校6年生である。日本で生まれたが0歳でフィリピンに移る。2年生で日本に戻った。母親はフィリピン人だが家では日本語を話す。父親は日本人で日本語を話す。兄はフィリピン在住で、兄がビデオコールでフィリピン語で話すことには「うん、うん」と返事するように分かるが本人は話せないという。母親の話では日本に戻ってきた当初、漢字ができずいじめられたが負けず嫌いな性格で一生懸命勉強し、以後漢字は満点を取っているという。日常の観

察では A や B のような気付きはなかった。

OBC 会話力テストの語彙カードでは、一つ単語が出なかったが後に思い出した。A、B 同様別の単語で言い換えをしたものがある。

対話面での問題はなく、アクセントやイントネーションは自然で文法的な問題もないが、発話は短い。また A と同じ学年であるが、年度末でありながら学校でまだ習っていないということで認知タスクが十分にできなかった。

8.4. まとめ

3名のうち2名はフィリピンで生まれ、就学期前に日本に移住し、日本の公立小学校で1年生から学習している。一人は家族内で多言語環境にあり、一人は主に日本語環境であった。

多言語環境にある子どもについては、テストではなく語彙カードのタガログ語版作成のために質問したときにいくつかの単語が思い出せず、周りの大人に聞かなければならないものがいくつもあった。これは家庭内では本人との会話に日本語、タガログ語、英語という3言語が同時に使用されていることからだろう。少なくとも日本語の語彙はあり、英語は分からないがタガログ語の語彙はないということである。

また1名は日本で生まれてフィリピンに移住、就学期途中でまた日本に来るといふ行き来をしている。日本語能力は同学年のAほどは高くなく、また幼児期と就学期初期に使用していたはずのタガログ語の発話ができず、バイリンガルとはいえない状態になっていた。

調査の後、Bは英語圏へ移住、Cは再びフィリピンの中学校に進学したため追跡調査が困難となったが、日本語環境ではなくなった先でのそれぞれの日本語能力とともに、移住先の家庭での言語環境、それに伴う会話能力がどのように伸びているか非常に興味深い。

9. 今後の課題

通信技術が発展し海を越えての動画付き音声のやりとりが安価で身近になった現代、子どもの調査から国境を越えた家族との会話も行われていることが明らかになった。アンケートでは家庭内での日常的な会話を調査するため日本在住の家族のみに対象をしばって質問をしたが、子ども自身の言語背景と今後海外に居住しながら頻繁に交流のある家族にまで広げて使用言語を調査する必要があるだろう。また、同居家族として父親、母親、子どもという3者の関係で調査をしたが、シングルマザーであったり、日本人父親の親が同居していたりする場合もあるので、家族状況を広げて調査し質問対象の世代を広げる必要もある。

さらに先述のとおりフィリピン国内には多様な言語が存在しているが、フィリピン人の中にもタガログ語は日本に来てから学んだという者もいて、親自身の第一言語、第二言語についても併せて調査する必要がある。

また、子どもの英語教育への関心が高いにも関わらず子どもに対して英語を使用していない理由あるいは背景について、親の英語能力と共に調査をする必要がある。

子どもBの親のように、おそらくもともと日本には一時滞在のつもりで日本語を話さない親のいる家庭もある。実際に第二世代と接していると、子どもCのように、タガログ語を聞いて理解することはできるが返答は日本語という子どももいるし、タガログ語を流暢に操る子どももいるし、就学期途中からフィリピンの学校に転校する子どもにも出会う。今後さらに子どもが持つ歴史、家庭環境などの状況を細分化して調査すること、また日本語のみならず継承語であるフィリピンの各言語について調査する必要性がある。

[註]

- i コミュニティー詳細は Yoko Fujimoto & Alec R. LeMay (2014) *Filipino Investment, Multicultural Return-Considering Cultural Group Dynamics within Umeda Church, Tokyo*-を参照されたい
- ii 太田 (2005) 『外国人の子どもと日本の教育』 pp.64-65
- iii プログラムについては Yoko Fujimoto & Alec R. LeMay (2014) *Filipino Investment, Multicultural Return-Considering Cultural Group Dynamics within Umeda Church, Tokyo*- p.49 を参照されたい
- iv 川上郁夫 (2003) 「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」 『早稲田大学日本語教育研究』第2号 p.5 にテストについて説明されている

[引用・参考文献]

- 1) 川上郁夫;年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」,早稲田大学日本語教育研究,2,5,2003
- 2) 河原俊昭;言語とアイデンティティー日本に住むフィリピン人を中心に一, 接触場面・参加者・相互行為 接触場面の言語管理研究,9(5),11,2011
- 3) 金 美兒;フィリピンの教授用語政策-多言語国家における効果的な教授用語に関する一考察-, 国際開発研究フォーラム, 25,103,2004
- 4) 「政府統計の総合窓口」国籍(出身地)別年齢・男女別外国人登録者;
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&listID=000001065021&requestSender=dsearch (2010.7.7)
- 5) ジム・カミンズ、中島和子訳;言語マイノリティを支える教育,慶應義塾大学出版会,2011
- 6) 三田村徳美、山崎瑞紀;異文化を背景に持つ親子が抱える問題に関するインタビュー調査, 東京都市大学 環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル,143,2010
- 7) 宮島 喬、太田春雄;外国人の子どもと日本の教育,東京大学出版会,2005
- 8) Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) 2014; *Ethnologue: Languages of the World, Seventeenth edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version:
<http://www.ethnologue.com>. (2014.11.12)

Multilingual Environment at Home and Japanese Oral Proficiency - Cases of the Children Whose Roots Are in the Philippines -

Yoko FUJIMOTO

abstract : This is to discuss the language used in the homes of children in Japan whose roots are in the Philippines. Most of these children have a Filipino mother who is at least bilingual and a Japanese father who is usually monolingual. The investigation was about the first language, second language, third language used between a Filipino and his or her child, between the spouse and the child, and between the children at home. This analysis was done in 2010. As a result, I found that the most common language used is Japanese, the second is Tagalog, and the third is English. If the spouse is Japanese, the most common language between the children is Japanese. If the spouse is Filipino, the most common language between the children is Tagalog. Though Filipinos speak Tagalog to their children, they think Japanese and English are more important. In this study, the oral proficiency in Japanese of three children was tested. Their family history and language used at home vary. The child who lives in a multilingual environment was fluent in Japanese, but that child's vocabulary was not great. Of the other two who lived in an almost monolingual environment, their vocabulary in Japanese was large enough regardless of the length of their stay in Japan.